

2015年 働く者のセミナー報告要旨 報告者・林
「商品」の矛盾もしくは歴史的限界とは何か
——商品の“価値”と社会主義の分配法則

1、「商品」とは何か、「交換価値」の本質は何か

私たちは、日常的に「経済関係」の中で生きています。ここで言う「経済関係」とは、その根底とは、商品を作ったり、売ったり、買ったりする関係です。「市場経済」とも、「貨幣経済」あるいは「資本主義」とも言われます。

私達が今ここで論じようという問題は、「商品」を主人公とした「市場経済」の問題であり、「貨幣」や「資本」は必要に応じて論じることもあるかもしれませんが、脇役であると考えください。

したがって、労働者(もしくは労働)の解放について語る場合も、単に搾取の廃絶ということだけでなく、労働が労働として直接に現れず、価値形態をとるということからの解放という意味で語られるし、語られなくてはならないのです。そして労働の解放をそうした意味で理解することによってのみ、社会主義のより深い、真実の概念に、つまりその本当の理解に到達できるのです。

したがって、私がこのセミナーで問題にし、議論するのは、「商品」とそれが表現している社会関係の問題、この資本主義社会で一般に「市場経済」の名で呼ばれている問題、その根底的な矛盾や限界の問題です。

しかしその場合、私達は、それを道徳的な観点から、つまり永遠の正義、不正義とか、正誤とか、善悪とかの観点から論じるのではなく、歴史的な観点から論じるのであって、その意味では、商品生産社会の歴史的な必然性や意義や、進歩的な側面さえ確認するのです。

ここで「市場経済」の問題というのは、賃労働とか、労働の搾取つまり利潤目当ての生産とか、経済的不況や景気変動とかといった意味でないばかりか、「商品」に固有であり、不可分と思われる、価格変動とか需要供給の問題でさえありません。つまりその意味では、ブルジョアが考えるような意味での「市場経済」はほとんど問題にさえならないのです。むしろ、それ以上のもの、商品経済を必然とする社会関係の真実、隠されているその真実、その“秘密”を、そうした意味での「商品」とは何かを明らかにしていくということです、つまりは商品経済——そうした意味での「市場経済」——の否定と止揚のためのセミナーということです。

そこで「商品」とは何か、商品は持ち手を変え、売買(交換)されてこそ商品ですが、その交換価値や交換を規定する法則とは何か、と問われても、日常茶飯事にやっていることなのに、我々はほとんどともに答えることはできません。私達は商品経済の社会の中に生まれ落ち、それ以来、ずっばり全生活をその中で生きて、それを自然のものと思っていて、なぜ商品社会なのか、なぜそれが存在しており、必要なのか、という疑問さえ持ちません。

歴史をさかのぼれば、人類が商品経済が支配的なものとなった社会の中で生活し、生きてきたのは、それほど長い期間ではなく、せいぜい300年くらいのものでしょうか。しかも最初はヨーロッパのごく狭い地域のことであって、現代の高度資本主義の時代にあつてさえ、世界中にはまだ「商品経済」の外にある、あるいはごく部分的にしか関係しない、多くの“後進的な”地域が残っています。

そんなわけで、私達は「商品」とは何か、商品経済とは何かという問題をここで考えて見ようというわけです。もちろん「商品」の検討は、直接には「資本」(資本主義)の検討とは別ですが、し

かし深く関係しており、「資本」の理解の出発点、基礎でもあります。商品価値の理解なくして資本主義の理解もまたあり得ないからです。

商品は他の商品と、様々な割合で交換されます。こうした交換関係は、したがってまた交換価値は、商品にとって、商品を商品たらしめる本質的なものです。

マルクスはここで非常に重要なことを語っています。

「一定の商品、1クォーターの小麦は例えば、x量靴墨、またはy量絹、またはz量金等々と、簡単にいえば他の商品と、きわめて雑多な割合で交換される。このようにして、小麦は、唯一の交換価値のかわりに多様な交換価値を持っている。しかしながら、x量靴墨、同じくy量絹、同じくz量金等々は、1クォーターの小麦の交換価値であるのであるから、x量靴墨、y量絹、z量金等々は、相互に置き換えることのできる交換価値、あるいは相互に等しい大きさの交換価値であるに相違ない。したがって、第一に、同一商品の妥当なる交換価値は、一つの同一物を言い表している。だが、第二に、交換価値はそもそもただそれと区別されるべき内在物の表現方式、すなわち、その『現象形態』であるにすぎない」(岩波文庫①70-71頁、以下同じ)。

そこで我々はまず、第一の問題の分析のために、2つの商品、例えば鉄と小麦を取り上げて、その交換価値を検討することにします。その交換価値は、10キロの小麦=1キロの鉄、といった公式で、それは表されています。

そしてマルクスは、この公式から「使用価値」を捨象する——さしあたり、ここでは考慮の外に置く、考えないという意味だと理解してください——と、共通のもの、そして量的に比較され得るものとして残るのは、2つの商品に「対象化されている」人間の労働、質を問わない、単なる労働の支出としての、その意味で抽象的な人間労働であると結論しています。

こうした「論証」には、共通のものは「人間労働」だけではない、人間の欲望の対象という性質もある、「蒸留法」は正しくないといった批判がブルジョアやプチブル(の知識人)から浴びせかけられています。ここでは無視して先に進みます。

ここで重要なことは、交換価値は単に「見える」だけのもの、仮象つまり単なる主観的な表象ではないということです。交換価値は、商品(使用価値としての商品)の交換比率として、現実的、実在的な関係です。だからこそ、商品の物神性が生じるのですが、この物神性については——したがって人々の物神崇拜的意識については——後に触れることにします。

人々は自らの生産物を交換しますが、それはその交換の基準を知っていて、そうするものではありません。社会が進化し、労働の生産力が高まると、生産物の交換が始まります——当然こととして、まず余剰生産物から。当初は交換比率はまちまちですが、しかし時とともにある水準に落ち着いてきます。しかし人々はそれがなぜその水準に落ち着くのかは考えません。単純な生産物交換、始まったばかりの交換では、自分の労働時間との比較を考える場合があるとしても——もちろん、こうしたことが、現在の発達した商品生産でも全くなくなるというわけではありません——、生産物交換が商品交換として発展し、慣習的になるとともに、その交換価値を規定するものが労働時間であるという意識は希薄化し、脱落します。

マルクスはまずこうした関係を分析し、商品から使用価値を「捨象」すれば、残るものは、それが人間労働の「対象化」としての「価値」であると結論しています。

こうした結論に対しては、ブルジョア学者からの、「マルクスは論証すべきことを前提にしている、商品として、労働生産物である商品だけを取り上げてきて、使用価値を捨象し、残る者は労働生産物としての性格だけだと結論している、まともな論証とはいえない」といった批判が繰り返さ

れてきました。

しかし商品とは社会的な形態としての富であって、使用価値であるとともに、また人間の社会的な労働の結果でしかなく、従ってその使用価値が「捨象」されるなら、商品の交換価値を規定する「実体」として、抽象的な人間労働が残り、析出されるのは一つの論理的必然です。

もちろん、2商品の単純な等値から明らかになることは、商品の「価値」とは抽象的な人間労働だということだけであって、これは本質的な概念ではありますが、これだけでは決定的に不十分です、というより、商品についてまだ重要なことはほとんど語っていないとさえ言えるのです。

というのは、マルクスが述べていた、「第二」の問題が残っているからです。つまり交換価値(10キロの小麦=1キロの鉄)は、「それと区別されるべき内在物(「価値」のこと、つまりすでに明らかにされた、商品に「対象化された」人間労働のこと)の表現方式、すなわち、その『現象形態』でありうるにすぎない」というあの問題、交換価値の関係のもう一つの契機である、価値形態の問題、価値の表現の問題です。

生産物が商品として交換されるためには、価値の表現がなされなくてはなりません、価値形態の発展がなされなくてはなりません。商品世界では、それは非常に目だつた「共通の価値形態」を持っていると、マルクスはいいます。

「人は、何はともあれ、これだけは知っている、すなわち、諸商品は、その使用価値の雑多な自然形態と極度に顕著な対照をなしている、ある共通の価値形態をもっているということである。すなわち、貨幣形態である」(同89頁)。

マルクスが言っていることは、平たく言えば、商品世界では、商品は皆同じ「価格」(民族国家ごとには違いますが、円とか、ドルとかの)を持っていて、それによって相互な交換が何の滞りもなく、自然に、一般的に行われているということです。

ここでマルクスが、「価格表現」と言わないで、「共通の価値形態」と言っているのは、商品の価格表現は価値形態の最後の段階のものであるということによります。つまり価格表現とは、価値形態の発展の結果として、貨幣が生まれ、その貨幣の機能として、貨幣としての金によって、金の量によって、商品の価値が表現されたものが「価格」だからです、つまり多くの論理的な積み重ねとして、価格は規定されるのであって、この論理的段階では、「価格」とはいえないからです。

価値形態の発展は、最終的には価格表現にまで進みますが、そのメカニズムは、すでに簡単な2商品の価値関係の中に存在し、潜んでおり、そこから理解しないなら、価値形態の、したがってまた価値表現の本性とメカニズムについて何ごとも理解できないとマルクスは強調し、単純な価値形態の分析と解明に力を注いでいます。

最初の等式では、2商品が「価値として等しい」と置かれ、その価値とは何か、その実体とは何かが検討されましたが、こんどは、2商品が交換関係の中で、異なった役割を演じることが検討されています。なぜ、そんなことが重要な意味をもつかといえば、商品が現実として交換されるためには、自らの価値を価値の形態として表現しなくてはならないからです、つまり現実商品が価格形態を持ち、それによって滞りなく交換されているように、そんなことが価値形態とその発展として、いかにして可能なのか、という問題です。

マルクスはこの秘密を、2商品の単純な交換関係、価値関係の中に見出したのです。つまりこの関係が、一方の商品、その価値を表現しようとする商品と、自らの肉体によって、価値表現を可能にする商品との関係の中にあることを“発見”したのです。

一方の商品(相対的な価値形態にある商品、『資本論』では亜麻布)は自らの価値を表現しようとして、積極的な役割を演じます、そして相手の商品(等価形態の役割を担わされた商品、『資本論』では上衣)を、まずみずからに価値として等しいとして等値し(有名な「回り道」です)、そのことによって、上衣を、その存在を、価値そのものとして措定し、その価値体としての上衣によって、自らの価値を表現する、つまり亜麻布は、まず上衣を自らの価値鏡として、その上衣によって、モノとしての上衣との交換比率として、こうした相対的なやり方で、自らの価値を表現するというのです。

当然のこととして、こうして表現された亜麻布商品の価値は、その概念にふさわしい、直接的に労働時間によるものではなくて、価値体として自らが措定した等価形態の上衣の身体を借りて、相対的に表現されたものでしかありません、しかし商品の価値としての表現はこれで十分なのです。

そして交換価値が一層発展すれば、ますます価値形態も発展し、その究極の果てには、一般的な等価形態が生まれます。

相対する商品の「価値」は、抽象的な「社会的な」実体であって、商品には直接に表現されていません(例えば、私は10時間の人間労働の結果である等々)、従って、価値の表現は、ただ商品の価値関係の中でのみなされ、“相対的に”表現されるしかないのです。

そしてそのことは、同時に、商品を生産する労働の「質」を、つまりその労働がいかなる歴史的な形を取って支出される労働——その意味では、歴史的な限界のもとにある、解放されざる労働、「疎外された労働」——であるかを自ら明らかにし、実証していくのです(もちろん他方では、商品を生産する労働は、徹底的に社会的な労働として展開され、その意味では進歩的であり、歴史的には大きな意義を持つのですが)。

そしてこうしたことが可能であるばかりか、必然であるのは、そもそも商品に対象化された労働が、最初から抽象的な人間労働、つまり質的に一様で、量的にのみ異なる労働であったということ、そしてそうしたものとして私的であるとともに社会的な労働であったからであって、一般的な等価形態にある商品(貨幣)の普遍的な社会的性格は、商品に対象化された労働のこうした性格の反映にすぎません。

2、商品の物神性と人々の物神崇拜意識

マルクスに言わせると、「商品」とは非常に奇妙なものだと言います。「机が商品になると、感覚的にして、超感覚的なものに転化する。机はもはやその脚で床の上に立つのではなく、他のすべての商品にたいして頭で立つ。そしてその木頭から、狂想を展開する、それは机が自分で踊りはじめるよりはるかに不可思議なものである」(129頁)。

実際、商品の最も単純な「交換価値」を想定しただけでも、それは理解不能なものとして現れています。例えば、一定の商品の交換価値——1クォーター(約291リットル)の小麦はx量の靴墨に等しいという交換価値——はよく考えてみると、奇妙なものです。小麦の一定量は、使用価値の一定量であって、いかなる基準によって、靴墨という他の使用価値の一定量と交換されるのか、され得るのか。私達は普通、こうしたことは当然のことであって、何ら不思議ではないと思ひ込んでいますが、しかし異なった使用価値を持つ生産物は、なぜ等しいのでしょうか。使用価値が違うから交換されるのですが、それは使用価値の種類が違うということをいうだけであって、なぜ等しいものとして交換されるかを全く説明していません。ブルジョア学者がよく言う、「使用価値一般としての価値」が等しいからという説明はもっともらしいのですが、なぜ一定量の小麦が一定量の靴墨と交換されるのかを説明しません。ここでは量が問題になるのですが、量としての使用価値は人

間の欲望とモノの関係であって、他の商品の使用価値との量的な比較の問題ではありません。異なった商品の使用価値の量や重さを比較しても、商品にとっては何の意味もありません。

そしてこうした商品の交換価値の関係は、単に「見える」といった関係ではなく、客観的な関係として、このブルジョア社会では現象しています。

そして問題は、この労働の性質です、つまり価値形態とその発展を必然化する、——これはまた、不可避免的に価値表現とその発展をもたらすのですが——、私的であるとともに、社会的な労働として自らを実現して行かなくてはならない、商品を生産する労働です。

すでに、私たちは、このブルジョア社会、商品生産社会では、労働生産物は、10キロの小麦＝1キロの鉄、といった商品の交換価値という形で表されていますが、それは使用価値とは無関係な、商品を生産する、人間の社会的な労働と労働時間の関係であることを確認しました。使用価値の使用価値としての関係としては、この公式(等式)それ自体、不合理なものでしかありません。そして商品生産と交換が、このブルジョア社会の全体的な関係である以上、それもまた、人間労働の全体的な社会的関係の反映であり、表現でしかありません。本来は人間の労働の関係が、モノの相互関係として、商品の交換価値の関係として現れているのです。

なぜそうなるのかと言えば、人間の私的な労働が、生産物の交換を通して、生産物の商品としての交換を通して、私的な労働であるとともに、社会的な労働に転化していくから、転化して行かざるを得ないからです。

しかし他方では、こうしたある意味では逆立ちした労働と生産物の関係——労働の方(労働者、生産者)から見れば、労働が生産物を支配するのではなく、反対に、生産物が、つまり商品とその交換価値が労働を支配し、拘束する、疎外された状態、未解放の状態——は、商品の物神性を不可避のものとするのです。

つまり、商品の物神性とは、人間の社会的な労働の関係が、商品の、モノの交換価値の関係、モノの社会的な関係として現れるということであり、モノの属性として、モノ自体に属する性格や本性として現れるということです。例えば、二つの、あるいは多くの商品が互いに等価として交換されるのは、それらに社会的に等しい労働が「対象化されている」——その生産に、等しい人間労働が必要とされた——からではなくて、商品自体に、つまり労働の結果である生産物自体に、モノのとしての商品自体に、そんな性質が内在しているかに見えるということです、否、そうした関係として現れているということです。

そしてこうした商品の物神的な性格を、そのまま意識に反映させるときに、物神崇拜意識が不可避となります。商品はモノとして商品であり、「交換価値」を持つのだとか、貨幣はモノとして貨幣であり、「一般的な交換性」を有するのだとか、資本はモノとして資本であり、「自己増殖」するのだとかいった、このブルジョア社会に現実に規定された、特有の物神崇拜的な観念です。

だから、私達は、商品の交換価値の、価値形態の秘密を知ったからといって、物神崇拜意識を克服することはできません。私達は、マルクスの「価値形態論」を学び、価値形態の秘密を知り得たとしても、だからといって、この社会で、商品の交換価値を廃棄して、労働時間によって生産や分配を行い、生活しているわけではなく——日々の生産物の分配や消費を、自覚的に、労働時間を基準にして行っているわけではなく——、やはり“価値法則”の制約と規制のもとで、そうした商品や貨幣や資本の物神性にとらわれたままで生活し、迷妄の中で呻吟し、右往左往することには変わりありません。

3、「過去の労働」とその移転問題

我々は、価値法則もしくは労働価値説の“延長上に”、つまり価値の概念から出発して、社会主義の分配法則も明らかになし得ると考え、それを追求してきました。というのは、そのことなくしては、本当の社会主義の内容と実際は明らかにならず、それを実現することはできないからです。

そしてマルクスもまた、いくつかの箇所で、そのことを語ってきました。我々がしばしば引用した、『資本論』の冒頭部分、第1章「商品」の4節でも、そのことをはっきり主張しています。私もどこかで引用したかと思いますが、念のため、もう一度引用させていただきます。

「最後に我々は、目先を変えて、自由な人間の一つの協力体〔資本主義を克服した後の社会、社会主義社会〕を考えてみよう。人々は、共同の生産手段をもって労働し、彼らの多くの個人的労働力を、意識して一つの社会的労働力として支出する。ロビンソンの労働の一切の規定がここで繰り返される。ただ、個人的であるかわりに、社会的であることがちがっている。ロビンソンのすべての生産物は、もっぱら彼の個人的生産物であった。したがってまた、直接に彼のための使用価値であった。この協力体の総生産物は社会的生産物である。この生産物の一部は、再び生産手段として用いられる。それは依然として社会的である。しかしながら、他の部分は生活手段として、協力体(共同体)の成員によって消費される。したがって、この部分は彼らの間に分配されなくてはならぬ。この分配の様式は、社会的生産有機体自身の特別な様式とともに、またこれに相応する生産者の歴史的発展の高さとともに、変化するであろう。ただ商品生産と比較するために、各生産者の生活手段にたいする分け前は、その労働時間によって規定されると前提する。したがって、労働時間は二重の役割を演じるであろう。労働時間の社会的に計画的な分配は、各種の労働時間が各種の欲望にたいして正しい比例をとるように規制する。他方において、労働時間は、同時に生産者の共同労働にたいする、したがってまた共同生産物の個人的に消費されるべき部分にたいする、個人的参加分の尺度として役立つ。人々のその労働とその生産物に対する社会的な連結は、このばあい生産においても分配においても簡単明瞭であることには変わらない」(同142-3頁)。

マルクスが、「ロビンソンの労働の一切の規定がここで繰り返される」と言っていることは、絶海の孤島における、ロビンソンの生活と、それを律する原理のことですが、それは以下のような内容です。

「経済学はロビンソン物語を愛好するから、まずロビンソンを彼の島に出現させよう。彼は控え目な男ではあったが、それでもとにかく彼は、各種の欲望を充足せしめなければならない。したがってまた、各種の有用労働をしなければならない。道具を作り、家具を製造し、^{つなご}ラマを馴らし、漁りをし、猟をしなければならない。祈祷その他のことはここでは語らない。というのは、われわれのロビンソンは、このことに楽しみを見出し、このような活動を休息と考えているからである。彼の生産的な仕事いろいろあるにもかかわらず、彼はそれらの仕事と同じロビンソンのちがった活動形態にすぎないことを知っている。したがって、人間労働のちがった仕方であることを知っている。必要そのものが、彼の時間を、精確にそのちがった仕事に分配しなければならないようにする。彼の総活動の中で、どの仕事か割合をより多くし、どのそれがより少なく占めるかということは、目的とした有用効果の達成のために克服しなければならぬ困難の大小にかかわっている。経験が彼にこのことを教える。

そして、時計、インクおよびペンを難破船から救い出したわがロビンソンは、よきイギリス人として、まもなく自分自身について記帳しはじめる。彼の財産目録は、彼がもっている使用対象、彼

の生産に必要な各種の作業、最後に、これら各種の生産物の一定量が平均して彼に支出させる労働時間の明細表を含んでいる。ロビンソンと彼の作り出した富をなしている物との間の一切の関係は、ここではきわめて単純であり、明白であって、特別に精神を緊張させることなくとも、これを理解できる。そしてそれにもかかわらず、この中には価値の一切の本質的な規定が含まれている」(同139頁、原典91頁)。

さてそこで、我々の間で問題となり、議論となったことは、資本主義的生産における「過去の労働」(資本価値、厳密に言えば、生産手段=不変資本の価値と言い換えてもいいのですが)と、その移転と言う問題でした。資本価値の移転という問題と、商品の価値規定との関連———というか、それが価値法則とどういう関係があるのか、ないのか———という問題でした。資本価値の移転という問題を混入して問題を考えると、価値法則とは矛盾し、混乱する、多くの困難が生じて来て、それはまた社会主義における分配問題を解決不能の迷路に導いていくしかないという問題でした。

マルクスが資本価値の移転という問題について語っているのは、労働の搾取を説明する箇所と関連してであり、そこではまた「生きた労働」と「過去の労働」という概念も持ちだして、資本を資本たらしめる、搾取のメカニズムを明らかにし、説明しています(岩波文庫第2分冊23-43頁)。

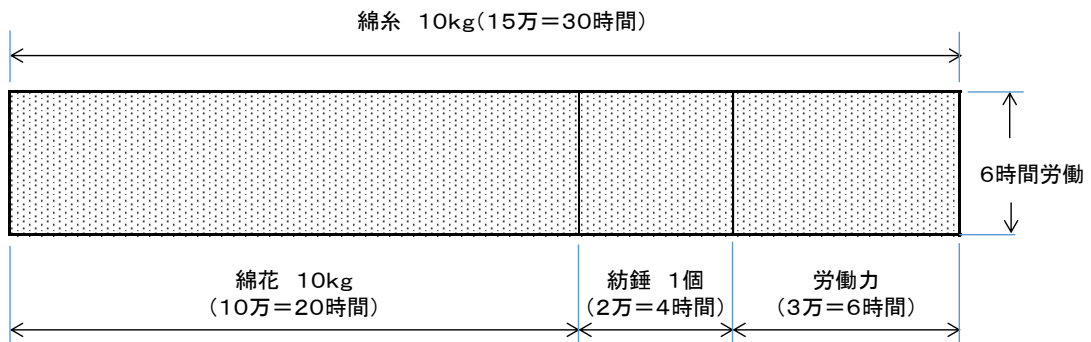
マルクスの説明は全部が文章でなされており、なかなか面倒で理解しがたいものなので、一つの表式にまとめてみました。そして当時の西ヨーロッパの度量衡を、現在我々が理解しやすいものに変えました(ポンドはキログラム、シリングは円に)。

労働力の“日価値”は3万と想定されています。上の表は、半労働日、つまり6時間だけ労働した場合として想定されています。他方、下の表は延長して12時間労働した場合です。いかにして、半労働日では生じなかった剰余価値=利潤が、下の場合、つまり労働時間が12時間と倍増した場合には生じるかが図表で示されています。これはある意味で、上の表は単純な商品生産の場合、下の表は資本主義的商品生産の場合であるということができます。

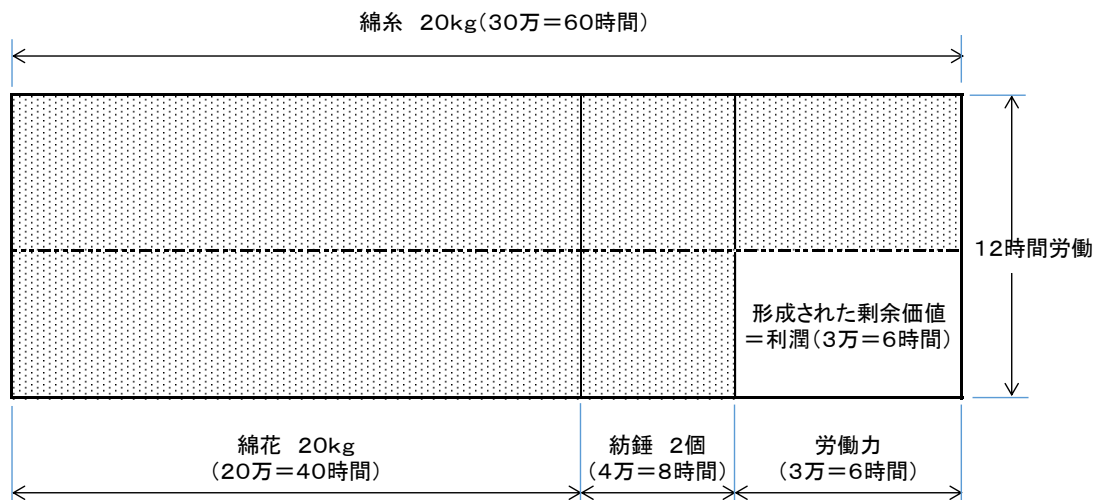
【図表1】

マルクスによる、生産過程における「労働の搾取」の説明表

1-1 6時間労働(半日)の場合



1-2 延長された12時間労働(1日)の場合



最初の6時間の費用価格 $10 + 2 + 3 = 15$ (価値15)

後半の6時間の費用価格 $10 + 2 + 0 = 12$ (価値15)

価値の合計30から費用価格の合計27を控除した剰余価値=利潤の3を、「居ながらにして」ブルジョアは手にすることができるわけです(図では、資本にとっての費用価格は、網かけの部分として表示されています)。

この表式からも明らかなように、マルクスが解き、説明しようとしている理論的課題は、「自己増殖する価値」(これは蓄積によって「増殖する」ということとは違います、まず何よりも、資本が労働を搾取することによって、つまり剰余価値を吸収することによって「増殖する」という、狭い意味でまず理解されるべきです)としての資本であって、その自己増殖が生産過程における労働の搾取によるものであることを、資本の運動の中で明らかにすることにあります。だから取り上げられているのは、個別の資本であって、総資本の運動は問題になっていません。そうした限界の中で読まないと、とんでもない勘違いをすることになります。

資本の生産過程の中では、生産的労働によって、生産手段も生活手段も(つまり使用価値は)「価値」とともに新しく生み出されます、しかし総資本としてのブルジョアが関心を持つのは、生活手段を生産する労働だけです、というのは、生活手段を生産する労働(その部分のみ)を搾取するのが彼らの目的ですから、そして生産手段を生産する労働を搾取しても何の意味もないからです、機械や原材料を食ったりして、個人的に消費しても意味がないからです、そんなことはできないからです。

これは使用価値とそれを生産する労働との関係でいえば、搾取で対象とされる労働は、生活手段を生産する労働に関してだけであって、生産手段を生産する労働はどうでもいいものだ——ブルジョアにとって、そう見なされている——ということです。

かくして彼らは労働者の生活手段を生産する労働を——彼らにとって、「生きた労働」に見えるのです——搾取するのですが、ブルジョア社会では、労働力を一種の商品として売買し、労働者の関係を商品の売買に関する経済的な関係に擬して、そんな形態に隠れて貫徹して行くのです。

他方、生産手段を生産する労働は、単に資本としての生産手段とその価値を再生産する労働として、個々のブルジョアにとっては、どうでもいい労働として、その意味でも「過去の労働=死んだ労働」として現象するのです。

資本価値（過去の労働もしくは過去完了の労働等々）の「移動」とか、過去の労働と生きた労働の対比もしくは対立とか、使用価値による価値移動とか、「労働価値説」とは矛盾する、あれこれの観念が語られており、一定の限界内での理論であることの反省が必要です。そもそもここで支配的な理論は、資本の立場からする、「費用価値(価格)理論」であって、労働価値説ではありません。つまり綿糸の価値は労働(時間)によって示されるのではなく、直接には、生産手段の価格と労働力の価格(と利潤——これは、1-2表の場合)の合計として示されるのであり、まさに費用価格による価格が綿糸の「価値」とされているにすぎません。個別資本の論理の枠内での議論でしかないということです。

マルクスは生産手段(不変資本)の価値移転について、次のような注目すべき発言もしています。「価値は、価値標章における象徴的にすぎない表示を別とすれば、一つの使用価値のうちのみ、一つの物のうちのみ存在する。(人間そのものも、単なる労働力の定在^{ミューゼン}としてみれば、一つの自然対象であり、たとえ、生きた、自己意識を持った物であるにしても、一つの物であり、そして労働そのものは、その力の物的発現である。)

したがって、使用価値がなくなれば、価値もなくなる。生産手段は、それらの使用価値とともに、同時にその価値を失うものではない、というのは、それらが労働過程によって、それらの使用価値が元来の態容^{モグタ}を失うのは、実際に、生産物において他の使用価値の態容を獲得するにすぎないからである。しかし、価値にとっては、何らかの使用価値のうちが存在することは重要であるが、それがいかなる使用価値の内に存在するかは、商品の形態変化が示すように、どうでもよいのである。このことから次のように結論される。労働過程において、価値が生産手段から生産物に移行するのは、生産手段がその独立の使用価値とともに、その交換価値を失うかぎりにおいてのみである。生産手段は、それが生産手段として失う価値のみを、生産物に渡す。しかし、労働過程の対象的諸因子は、この点にかんしては、色々とちがった事情がある」(第3篇第6章、第二分冊49頁)。

微妙な言い方ですが、既存の生産手段は新しい生産手段の——そしてまた当然に生活手段の——生産のために、つまり使用価値の生産のために役立つのですが、しかし既存の生産手段の(また生活手段の)価値は新しい生産物の価値は作り出すことはできない、とマルクスはいうのであり、だから価値はただ移転されるのみだということです。ブルジョアにとっては、そう見えるだけである、と我々は結論するしかないのです、というのは、使用価値が新しく商品として、つまり新しい使用価値及び価値として再生されるといふなら、価値もまた同様に再生産されるとしなくては、商品価値の根底に、その概念の根底に矛盾し、齟齬を来すしかないのである。

これは個別資本の理論として考えられるべきであって、社会的な総資本の再生産として、つまり「再生産表式」の視点から見たときは、別の視点が必要とされるということです。つまりそこでは、生産手段の価値として再生産されるのは、その生産手段の生産のために支出された労働(時間)であるということです。前年の生産手段の価値は、使用価値がなくなると同時になくなるのであり、年々の生産的労働によって、生産手段が(使用価値が)再生産されるとともに、価値としても再生産されるのであるし、「価値論」として一貫するにはそうなるしかありません。

4、社会主義社会における消費財の分配法則

商品経済を律するいわゆる“価値法則”は社会主義における分配法則にまで適応されて始めて、その意義を最後まで貫徹させ、まっとうさせたといえるのです。もちろん、社会主義において意義を持つのは、価値法則そのものではなく、その中の一つの契機、つまり「価値規定の内容」だけ

です、つまり、商品価値の内容——それが抽象的な人間労働であり、その大きさはその労働の継続時間であるということ——こそが、個々の労働者にとって、社会の総消費手段からの彼の分け前を、つまり「労働（時間）に応じた」分配を決定し、規定するということです。

我々に取っては、消費財の分配法則の解明は、まさに「古くて新しい」問題でありました。

『資本論』の冒頭の「商品論」（1巻1編1章）をいくらかでも注意して読んだ者には、そして社会主義における消費財の分配について考えた者には、「労働（時間）に基づく分配」という概念に行き当たるとともに、“単純な”商品社会においてならともかく、発達した商品社会、つまり商品が資本の結果として現れる資本主義の社会においては、そのことは実際の、具体的にいかになさるのであろうか、あるいは、そもそもそれは可能であろうかと考えた人も少なくなかったでしょう。

そしてまた、我々は、丁度25年ほど前（つまり1990年前後の、ソ連邦やソ連共産党の瓦解と崩壊という、まさに大きな歴史的転換期、マルクス主義の根底的な理論も深刻に動揺した時期）、共産党のインチキンテリたちの議論——社会主義においても、労働（時間）に基づく分配は不可能であり、「市場経済」の法則によって、つまり需要・供給や価格変動や商品交換等々によって行われるという主張——に反対し、それは可能であるし、また可能であるばかりではない、労働の解放が成しとげられる社会主義においては、そうした分配法則は、真実の社会主義社会——それを「科学的社會主義」の実現であるというか、いわないかはさておくとして——においては本質的な契機であると強調し、どさくさに紛れて、マルクス主義の根本概念を否定しようとする悪党たちに反撃しました（共産党の連中の理屈と、それに対する我々の反撃の内容は、『プロメテウス』55・56合併号、13～20頁参照）。

しかし我々は当時——そして今に至るまでも——、多くの議論や理論的な追求にもかかわらず、最終的な結論に立ち至ることができず、最後の“発見”ができないままに、結論をいわば「先のばし」にし、議論も「保留」してきました。

しかし我々は社会主義に向けての闘いにとって、不可欠の、決定的な重要な、この問題をなおざりにしておいていいわけはなく、またスターリン主義によって致命的に汚され、腐らされてしまった、労働者階級の社会主義運動の本当の意義を明らかにし、その真実の“復活”をめざす上でも、“死活”の重要性を握っているともいえるのです。

我々は今回のセミナーをチャンスとして、社会主義における分配問題についての法則を明らかにする、一つの表式を提出し、議論と検討にゆだねたいと思います。

まず、いくつかの前提について語ります。

1、「資本（過去の労働）移転説」と決別し、社会的な分業（とりわけ、第Ⅰ部門＝生産手段を生産する部門と、第Ⅱ部門＝消費手段を生産する部門の分業）という見地から出発します。

2、社会（共同体）の総生産は180とし、第Ⅰ部門は120、第Ⅱ部門は60とします、つまり自然的、技術的有機的構成は一様に——つまり部門間でも産業間でも——2対1とします。ここでいう、180とか120とか60とかの単位は労働時間であり、またそれに対応する労働生産物（使用価値）の量でもあります。単位は共同体の大小に応じて、適宜に想定され得ます。この関係を式で示せば、以下のようになります。

なお、「生産手段分」とは、それぞれ生産手段と費手段の生産に支出されているが、消費手段に対する権利を有する部分の労働のことであり、また c 、 v 、 m とは、資本のもとでは、それぞれ不変資本（ブルジョアの生産手段）、可変資本（労働力の価値＝労賃部分＝労働者の生活手段）、剰余価値＝利潤（ブルジョアの生活手段）の部分です。

$$\text{総生産} = \text{生産手段分} + \text{消費手段分}$$

$$\text{生産手段の生産部門 (第I部門)} \quad 120 = 80(c) + 40(v+m)$$

$$\text{消費手段の生産部門 (第II部門)} \quad 60 = 40(c) + 20(v+m)$$

3、消費手段は10のAと、20のBと、30のCの3種類が生産され、消費されるとします。

4、共同体(生産者=消費者)の構成員はW、X、Y、Zの4名とします。したがって、4名で120の生産手段と60の消費手段を生産し、また消費することになります。

かくして消費手段の分配法則の1例は、図表で示せば以下のようになります。

	A	B	C	計
W	1	2	12	15
X	4	8	3	15
Y	2	4	9	15
Z	3	6	6	15
計	10	20	30	60

余りに簡単で、何を語っているか分からない、何ものも語っていないのではないかと等々と軽率にいうなかれ。真理はしばしば(あるいは常に)、単純であり、美しいと、古来から言われてきたことを想起してください(もっとも、それが容易に理解され得るかどうかということとは別ですが)。

簡単な表式ですが、しかしこうした結論に到達するには、我々の内部でも長年にわたって、延々と議論がかかわされ、継続されてきた——もちろん、断続的ではありましたが——、その結果であり、単なる思いつきといったものではなく、まさに多くの理論的な困難を一つ一つ、順次検討し、解決し、問題の真実の「解」を求める、1990年代以降の、我々の真剣な理論的検討と追求のたまものであるといえます。

まず我々が「クリア」しなくてはならなかった、最も重要であり、困難で錯綜した理論問題は、「過去の労働」という観念であり、それが「資本価値」として、商品の再生産において「移転」されるかどうか——この観念は、この移転は「具体的有用労働」によるという観念と不可分でありました——という問題でした。そしてこれは「価値法則」そのものの根源——商品の価値とは何か、その大きさは何か等々——にも深く関わる問題であったが故に、長い間、我々の中での大きな係争問題、理論的な対立となり、今にまで至っています。

そして、こうした「過去の労働」の商品価値の一部としての移転という観念は、マルクスのものであり、『資本論』に明記されているから真実であるという見解によって支持されていたために、一層困難な、解決不能の理論問題として現れました。

しかし我々はこうした観念が、ブルジョア社会に現れた、人間労働の関係が商品=交換価値という形態、「価値」の形態を、従ってまた貨幣や資本という“物質的な”(“物象的な”、という言葉を使うべきだという“哲学者”もいますが)形態を取るところから生じた、物神崇拜的意識——といっても、それは単なる誤解や幻想というものではありません、というのは、商品=資本主義的生産社会では、商品の交換価値は現実的であり、必然的だからです——と結びついた、多くのイデオロギーや理論を克服しなければならなかったのです。

例えば、我々はしばしば持ちだした例ですが、マルクスは『資本論』の中でも、「資本とは自己増殖する価値(貨幣)」であるという規定について語っていますが、しかしそれは賃労働と資本の階

級関係としての資本の本質的な概念ではなく、このブルジョア社会における、資本の物神性にとらわれた意識、限界のある概念——しかしブルジョアにとっては、必然的な意識——として言及しているのは余りに明白です。実際に、このブルジョア社会では、それは現実的な関係として現象しているものであり、しかもそれは“物質的な”現実として、客観的に実存しているのであって、単なる「仮象」ではないのです。マルクスがこの観念を持ちだしたのは、それが資本の真実の概念だと考えたからではなく、ブルジョア社会では、資本はそうした“物質的な”形態で存在しているのであり、マルクスはまさにそうした現実から出発して、資本の本当の内容とは何か、その真実の概念は何かを追求しているのです。だから、マルクスは資本概念として、「資本は自己増殖する価値」と語ったことを鬼の首でも取ったかに感激し、持って回るような人間は——かつての急進派の雄、水沢某(服部信司)のように——、ただ自らの浅薄さを暴露するにすぎません(私の記憶している、もう一つの観念は、彼が、「価値論で重要な所は、価値形態論なんだよな」とつぶやいた、そんな観念でした。もちろん、私は反発しましたが)。

マルクスの言葉も、それがどこで、どんな意味で言われたかを反省しないで、ただ「マルクスが言った」というだけでマルクスの言葉を持って回るなら、そんなことは宇野学派でもできることであって、我々は、それがいかなる意味で、いかなる文脈で言われたのかを反省してかかるべきなのです。

そうすれば、資本価値(いわゆる「過去の労働」)の移転という議論が、資本(個々の資本)の論理として、資本の自己運動の中で、問題とされていることが確認されるし、されなくてはならないのです。そうした議論にとらわれている限り、社会主義における分配問題どころか、価値法則一般に対しても、首尾一貫した、合理的な観点を保持することができなくなるのは自明であって、そうした方向に進もうとした人々が何一つ、積極的な理論展開をなし得なくなったのも決して偶然ではありません。

試みに、資本の総生産と総流通を扱った、資本論の2巻での再生産表式を思いだしてみてください。その表式は、過去の労働(資本)の移転といった観点に立つなら、永遠の非合理と矛盾と混沌に陥る以外ないことがたちまち明らかになるでしょう(価値の二重計算等々)。

過去の労働の移転という最大の理論的困難が——つまりは空文句が——解決されるとともに、我々の議論も解決に大きく近づきましたが、しかしまだ解けない未知数があり、最後の解答が得られませんでした。

問題の一つは、全体としては、総労働の3分の2は、生産手段の生産に配分され、3分の1は消費手段の生産に支出され、この3分の1(の労働に匹敵する消費手段)が、全体の労働者に分配される——というのは、問題は最初から、消費手段の分配法則だからである——、ということは明らかでしたが、しかしそれは一体いかなる形でなされるかを明示することでした。2012年の春の労働者セミナーで検討され、議論したことは、消費手段の価値を個別的に明らかにしようという試みであって、法則的に明らかにしようとするものではなく、またそうすることができず、その点では依然として我々の見解は根本的に限界にあるものであり、“弁証法的に”止揚されなくてはなりませんでした。

もちろん、我々はすでに「価値移転論」は根本的に克服しており、価値移転論ではなく、分業の問題であるという前提に立ってはいたのです。「過去」の労働とその移転論は、社会主義における分配法則とは無関係であるという結論は、必然的に、問題の根底は、分業の問題である、つまり総労働の社会的な分業——その中で一番重要で、根本的なものは、生産手段を生産する労働と、消

費手段を生産する労働の分業です——という、もう一つの決定的な結論に、我々を導いたのです。

しかしそれだけではまだ解決にはほど遠かったのです。残された問題は、個々の労働者が、共同体社会の個々の成人が、自分の労働(労働時間)に応じた分配を受けるということであり、またいかにして受けるかということでした。

さらには、個々の労働者の欲望は多種多様で異なっており、従って皆、自分の労働時間の内のいくばくかを、どんな消費手段に配分するかで異なっていることでした。

さらにより深刻な困難は、個々の消費手段の価値(その生産に要した労働時間)をいかにして規定し、確定するかという問題でした。それが解答されなければ、問題の解答は得られないのは明らかでした。

そして個々の消費手段の「価値」の決定という難問の答えはなかなか見つかりませんでした。個々の商品の技術的構成——生産に要する労働時間の内、生産手段のために支出される労働時間と消費手段に支出される労働時間の比率——の問題が絡んでいるように思われ、その問題の解決が見えてこなかったのです、というのは、個々の生産物の価値を規定し、決定するには、生産物の技術的な有機的構成に差違が問題になるように思われたからです。かくして、我々は個々の消費手段の「価値」を、個々の消費手段のために支出される、生産手段のための労働と、実際にその消費手段のために支出された労働の和として、個々の商品ごとに規定するしかないという観念にとりつかれたのです。

なぜ個別的な形の論証に向かったかという、それぞれの商品には、それぞれの技術的な有機的構成に違いがあり、それが分配に影響を及ぼし、従って、消費手段の労働時間も個別的に明らかにしなくてはならないということです。

そして最後のカギは、この有機的構成の問題の解決でした。我々是有機的構成は一樣と前提することで、理論的な困難がなくなり、容易に解決することができることを“発見”したのです。つまり技術的な有機的構成は生産手段生産部門でも、消費手段生産部門でも、否、すべての産業においても、一樣であると想定するという事です。我々はこの前提によってのみ、究極的な「解」にようやく到達したし、し得たのです。

かくして我々は社会主義における消費手段の分配の法則を明らかにする、簡単な一つの表式を提出することができたのです。

我々のこの表式では、我々が問題にしてきたすべての難点は克服されており、また社会主義の分配法則の前提としてきたすべての条件はクリアされています(と思います)。

価値の理論(“価値法則”)が明らかにした、「価値規定の内容」は、すべて満たされています。

この表式では、共同体社会(社会主義社会)の総生産(のための労働時間)は180であり、そのうち120は生産手のために、60は消費手段のために支出されています。そしてこの60(時間分の消費手段)が、社会のすべての成員に、彼らの労働時間に従って分配されます(この表式では、簡単のために、成員は4人——W、X、Y、Z——と仮定されています)。

他方、消費手段は3種類(A、B、C)で、各10、20、30が生産されたとします。Aを生鮮食料品などの基礎的必需品、Bを衣料など日常的必需品や、基礎的なインフラ——電気、ガス、水道等々——などの生活必需品、Cを住宅とか自動車とか冷蔵庫などの耐久消費財等々と想定することもできるでしょう。

社会の総労働は、生産手段部門と消費手段に、それぞれ2対1の比率で配分されていますが、個々の成員の労働は、45時間であり、その内の30時間は生産手段のために、15時間が消費手段の

生産のために支出されています。従って、各人は消費手段のために支出した15時間分に相当する消費手段を、自らの欲求と必要に従って手にすることができます。

したがって、4人の成員は、各々3種類の消費手段から15の範囲内で、自分の必要と欲望にしがって消費手段を自由に手にすることができます。

そしてもちろん2012年のセミナーでさんざん議論し、確認したように、あれこれの消費手段の取得比率は各人の自由であり、その選択は任されます(社会主義や共同体社会は個人の「自由」を抑制するだけだ、資本主義や市場経済社会こそ万々歳だとしかいいえない、愚昧なりベラルや市民主義者や個人主義者の諸君のために、あえていうなら)。また、成人は自らの意思に従って、可能なら、労働時間を延長し、従ってそれに相当する消費手段を余計に受け取ることができますし、他方労働時間を短縮することも可能です。その場合は、それに応じて消費手段をより少なく手にすることになるでしょう(12年セミナーについてはいえば、その報告集でもある『プロメテウス』55、56号合併号にぜひとも目を通して、今回のセミナーに参加されるなら、今回のセミナーの議論もよりよく、またより深く理解され得ると思います)。

ここでは、労働が抽象的な労働としては、質的に同一、同等であって、ただその長さによってのみ区別されるという、価値規定の内容——現代の労働のこうした内容規定は、まさに資本主義の発展とその進歩的な要因のなかでも、最も重要なものの一つであるといえるのですが——が大きな意味と意義を持つてくることは容易に理解され得るでしょう。その前提なくして、社会主義における合理的な分配法則は不可能です。

ここではさらにまた、「過去の労働」とか「生きている労働」の区別とか、「過去の労働」(資本価値)の移転とか、したがってまた、「過去の労働」と「生きた労働」によって、商品の価値が規定されるとかいうことは問題にもなっていません。といっても、例えば1年間に(ある期間に)支出された総労働という意味での、「生きた労働」——実際に支出された労働の全体——という観念は当然、意味を持つてくるのですが。

我々の過去の議論においても、社会主義においても、生産手段の「価値規定」(価値概念)が重要な意味を持つてくるという議論がありましたが、実際的には意味を持つてきません、というのは、それは自然の法則として現れるだけであって、消費手段の分配におけるような、実際的な社会的意味を有しないからです。ただ、「過去の労働」やその「移転」という観念を捨てきれない場合のみ、そんな余計な気苦労が必要になるにすぎません。

そしてまた、この図表においては、マルクスのいう、「ロビンソンの労働の一切の規定」が存在しており、その条件が満たされています(もちろん単純な商品生産ではなく、資本主義的商品生産の高度の発展という現実を踏まえて)。

そして我々は、社会主義(初期の段階の共産主義)を共産主義(高度の段階の共産主義)と「万里の長城」で区切り、区別するどんな理由も必要もなく、労働生産力の上昇と生産的労働の合理的な組織化の進展とともに、徐々に、そしてまた急速に高度の共産主義に向かって進み、「各人はその能力に応じて働き、各人はその必要に応じて与えられる」というあの原則が自然と現れて来ることを、この表からも見通すことができるのです。

「報告要旨」校正 2015/10/18

- P3 3P 1L 2商品の単純な等値 ⇒ 等置
P4 1P 3L 等値 ⇒ 等置
P6 1P 2L そのことなくてして⇒そのことなくして
P8 3P 5L そんなことはできないか(ら)です
P9 1P 2L 使用価値による価値移動 ⇒ 有用労働による価値移動
P9 4P 後ろ 2L 使用価値及び価値として再生(産)される
P10 下 1P 1L 「生産手段」⇒「消費手段」
同 費手段 ⇒ 消費手段
P11 下 2P 下 2L 「――と結びついた」以下を変更。――であると考えます。我々が克服しなければならなかったイデオロギーと理論の一つだということです。
P13 2P 2L 成人 ⇒ 成員
P13 下 3P 2L 生産手 ⇒ 生産手段

なお、7-8 ページのグラフ、文中の「万」は「万円」のことです。